

令和4年産水稻育苗講習会資料

令和4年4月18・19日
JAたかさき
西部農業事務所普及指導課

令和4年産の注意点！ ・種子消毒の徹底 ・いもち病防除
・十分な浸種による催芽 ・出芽～育苗期の温度管理

1 育苗管理

資材の消毒

- ・瞬時浸漬するか、薬液をジョウロで散布する
- ・資材は、消毒後半日ほど風乾してから使用する

資材消毒剤 例	イチバン	対象:育苗箱
---------	------	--------

種子の比重選

比重液	比重	水量	硫安
うるち	1.13	10リットル	2.9kg
もち	1.08	10リットル	1.9kg

- ・充実した種籾の選別を行う
- ・比重選後は十分な水洗い

種子消毒

- ・種籾1kgあたり薬液は2L用意する
- ・浸漬中に1～2回かく拌する
- ・種子消毒後、水洗いしないで浸種を行う

薬剤例・	テクリードCフロアブル ヘルシードTフロアブル	いもち病・ばか苗病・もみ枯細菌病等
	スミチオン乳剤	イネシンガレセンチュウ

浸種催芽

- ※十分に吸水させて、発芽のそろいをよくする
- ・水量は種籾量の2倍以上とし、3日目以降は1～2日に1回、水を静かに交換する(停滞水中で行う)
- ・**ハトムネ状態**になるまでの**積算温度は約100℃**が目安
平均水温25℃で4日、20℃で5日程度
- ・もみ枯細菌病の発生を防ぐため、水温は**28℃未満**とする



芽が1mm
伸びた状態

は種

※軟弱徒長や苗立枯病の原因となるため厚播きを避ける

	箱あたりは種量(乾籾)	育苗日数	苗令(完全葉)	草丈
中苗	80～100g	25～30日	3.5～4.5枚	15～20cm
稚苗	160～180g	20～22日	2.0～2.5枚	10～15cm

床土かん水

は種前に十分かん水:1箱あたり1～1.5リットル

床土処理

薬剤 例	ダコレート水和剤	苗立枯病(リゾープス菌、トリコデルマ菌、フザリウム菌)
		いもち病(苗いもち)

覆土

ムレ防止のため、覆土後のかん水はしない

苗立枯病症状



リゾープス菌



ピシウム菌

病原菌名	特徴	発生要因
フザリウム菌	もみの周りに白いカビ	過乾・過湿 低温・傷もみ
リゾープス菌	出芽時に箱全体に白いカビが発生、その後灰色になる	出芽時の高温・多湿、 緑化期以降の低温
トリコデルマ菌	地表面・もみの周りに白～青緑色のカビ	高温・乾燥
ピシウム菌	地際部が水浸状に腐敗し、急にしおれて枯死、カビは見られない	低温・過湿 河川等からのかん水

出芽

温度管理に注意！！ 高温障害、病害対策

積み重ね
出芽

- ・湿害や苗立枯病予防のため、パレットや角材等の上によく水を切ってから積み重ねる(15段程度)
- ・最上段には空箱を乗せ、ビニールシートやムシロで保温する



もみ枯細菌病苗腐敗症

- ※病害発生防止のため、28℃を超えないように、日陰等に置く
- ・4、5日程度積んで、土から芽が0.5～1 cm程度出たら広げる

緑化期

【出芽後3日間】

- ・白化現象防止のため、寒冷紗等で覆い、強い光と寒気に当てない
- ・気温が低いときは、保温シート等を活用する
- ・かん水は、湿害防止のため、ジョウロ等で上から行き、苗床に水がたまらないように注意する

硬化期

【緑化後(出芽後4～5日以降)】

- ・緑化後は光を十分に当て、ずんぐりとした苗にする
- ・苗の栽培適温：20～25℃程度(日中30℃以下、夜間15℃以上)

【ビニールプール育苗のポイント】

- ・水深2cm程度に水を入れ、1度水を入れたらその水がなくなってから半日～1日後(天候によって加減)に水を入れ、根腐れを防ぐ

苗の追肥

1箱あたり 水1リットル 硫安5g

- ・育苗後半、肥切れがみられたら実施
- ・散布後は、茎葉に付着した硫安を水で軽く洗い流す

病虫害
防除

- ・いもち病は、常発地等発生の多いほ場では、殺虫殺菌剤を用いる
- ・イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカ(ウンカ類)の防除を行う
→「コシヒカリ」「ひとめぼれ」は、感受性品種のため要防除

箱施用剤

薬 劑	ルーチンアドスピノ箱粒剤	いもち病、ウンカ類、イネミスヅウムシ、イネドオイムシ、フタオビゴヤガ 等
例	フェルテラスタークル箱粒剤CU	ウンカ類、ツマゲロコバイ、コブノメイガ、イネミスヅウムシ、イネドオイムシ 等

2 本田の準備

土づくり

土壌分析結果から確認

目標 数値	pH	有効態リン酸	交換性カリ
	6.0~6.5	10~30mg/100g乾土	25mg/100g乾土以上

- ・作土深15cm~18cm(根域の確保)
- ・土壌診断に基づく土壌改良(バランスのよい土づくり)
- ・ケイ酸資材の投入(根張り向上による活力維持)

土壌 改良 剤の 施肥	ケイカル	100~150 kg/10a	<ul style="list-style-type: none"> ・水稲1作で吸収されるケイ酸の量は約160kg/10a ・吸収されたケイ酸は、イネの表皮組織を強くし、耐倒伏性や耐病害虫性を高める
	ようりん	60 kg/10a	<ul style="list-style-type: none"> ・土壌分析に基づき、成分が足りない場合に施用する

基肥の 施肥目安

- ・地力や品種に合わせて適量を施用する。肥料の入れすぎは倒伏や病害を助長する

品種名	N:窒素分量	P:リン酸分量	K:カリ分量
コシヒカリ	3~4	9	7
ひとめぼれ	5~6	9	7
あさひの夢・ゆめまつり	6~7	8	7

3 田植え~生育初期

田植え

- ・栽植密度と植え付け本数の目安

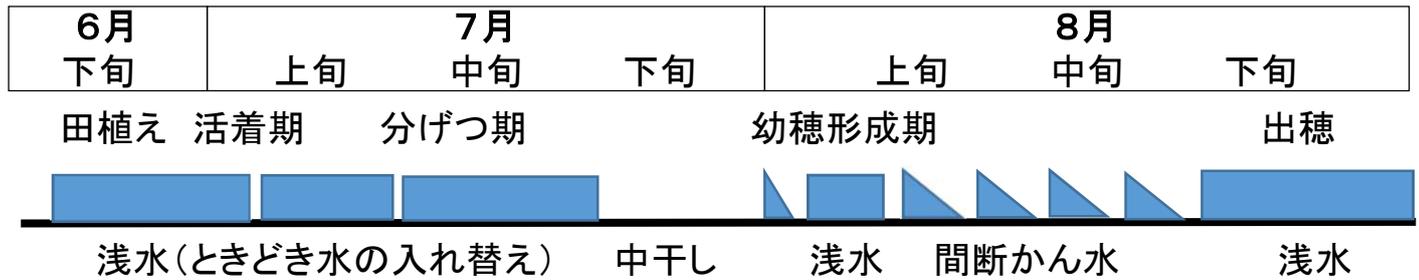
苗の種類	播種量 g/箱	箱/10a	株数/m ²	本/株
中苗	100	20~25	18前後	4~5
稚苗	180	15~19		5~6

- ・晩生品種「ゆめまつり」「あさひの夢」の移植晩限
平坦地 6月25日

田植え後 の水管理

- ・分けつの促進のため、中干しまでは浅水で管理する
- ・土中でガスの発生がある場合は、ときどき水を切って田面を露出させ、水の入れ替えを行う(ガス抜き、根腐れ防止)
- ・薬害等の発生時も数日間水を切って根の発根を促す
- ・中干しは、田面に小ヒビが入る程度行き、麦わらやその他有機物をすき込みした水田は、中干しを徹底する

麦あと「あさひの夢」「ゆめまつり



カリの 中間追肥

- ・登熟歩合の向上、粒の肥大、稈質の強化、根張りをよくして倒伏防止、病害抵抗性の向上、高温登熟障害対策につながる

施肥時期	ケイ酸カリ	30kg/10a
出穂30～50日前	塩加カリ	10kg/10a

4 雑草防除

除草剤をよく効かせるために

- ・抵抗性雑草発生防止のため、同一薬剤の連用は避け、成分の違う薬剤をローテーションする
- ・ほ場整備をていねいに行い、漏水を防ぐ
- ・農薬の散布時は水口と水尻をしっかりと止め、湛水状態を保つ
- ・農薬散布後の7日間は、落水や掛け流しをしない
- ・移植前に農薬散布した場合も、散布後の7日間は落水しない
- ・ジャンボ剤は、田面の凹凸やウキクサ等が多いと拡散しにくいので注意する

「田植え同時処理」除草剤での薬害防止について

- ・植え付け後の土の戻りが悪いほ場では、植え付け穴に除草剤が流れ込んでしまうため、田植え同時処理は行わない
- ・代かきはていねいに行い、田面を均平にする
- ・田植えはヒタヒタ水の状態で行う
- ・田植え後は、速やかに入水する(湛水深3～5cm確保)
- ・補植は極力行わない

後期除草剤

- ・オモダカやクログワイ等の多年生雑草や、ヒエ等の雑草多発ほ場では、初・中期除草剤と後期除草剤の体系で防除を行う
- ・近年、発生の増えている“ホソバヒメミノハギ”、“クサネム”は、初・中期剤の効果が切れた後に発生することが多いので適切に防除を行う
- ・散布時は使用方法(湛水or落水)、使用時期(収穫前日数等)をよく確認する



ホソバヒメミノハギ



クサネム

4 病害虫防除

いもち病

※令和2、3年産といもち病が発生したので、注意を

【特徴】・葉いもちの初発は、7月中旬～下旬ころ

・葉いもちが多く、上位葉に病斑が見られる場合は、穂いもちが発生しやすくなる

【発生しやすい条件】

- ・平均気温19～25℃、降雨頻度が高い、多湿
- ・夜間の風が弱く、朝露の乾きが遅い
- ・イネが軟弱徒長気味で葉色が濃い



【防除対策】

・箱施用剤による予防

- ・葉いもちの発生が多い場合は、追肥しない
- ・穂いもち防除は、粒剤は出穂20日前から、液剤は穂ばらみ期及び穂ぞろい期に行う

薬剤 例

ノンブラスフロアブル

ゴウケツ粒剤・パック

カスミン液剤

稲こうじ病

【発生しやすい条件】

◎前年発生したほ場、生育後半の窒素過多

◎出穂20日前～出穂期頃の低温・日照不足・多雨で発生しやすい

【防除対策】

- ・適切な施肥、遅効きにならないように追肥にも注意する
- ・発病したもみは早期に取り除く

◎適期に薬剤を散布することが重要



稲こうじ病

＜散布予定日をカレンダーに書き込んでみてください＞

①稲こうじ病は、薬剤の効果のある時期が限られています

②使用する薬剤の種類を選び、幼穂を確認して、散布する日を決定しましょう

薬剤 例	ドイツボルドーA	出穂前15日ころ	幼穂約2cm
	モンガリット粒剤	出穂前18日ころ	幼穂約1cm

例) 令和4年 8月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

・ドイツボルドーA

● 8/5ころ

・モンガリット粒剤

⚙ 8/2ころ

平年の出穂期
はこころへん

幼穂約1cm



紋枯病

※紋枯病の発生は倒伏を助長するため、多発ほ場では防除を行う
【発生しやすい条件】

- ・前年に発病した株に形成された菌核が病気の原因となる
- ・早植え栽培で発生が多い
- ・幼穂形成期以降の高温・多湿で多発する

【対策】

- ・幼穂形成期～出穂期に薬剤散布

薬剤 例	モンガリット粒剤
------	----------



紋枯病

イネ縞葉枯病

- ・イネ縞葉枯病ウイルスを保毒したヒメトビウンカによる吸汁で感染
- ・感受性品種:コシヒカリ、ひとめぼれ、キヌヒカリ、・・・など

【症状】

- ・葉に不明瞭な縞が現れ、こより状に巻いて垂れる
- ・移植直後に発病すると、発病株が枯れる
- ・幼穂形成期以降に発病すると、穂が出すくみや奇形となる

【対策】

- ・抵抗性品種(あさひの夢、ゆめまつり)の作付けを検討する
- ・箱施用剤の使用、追加の本田防除(7月下旬～8月上旬)
※プリンス粒剤(成分:フィプロニル)が効きにくいヒメトビウンカが確認されているため、使用を控える

本田防除 薬剤 例	ダントツ粒剤	スミチオン乳剤
-----------	--------	---------



ゆうれい症状



出すくみ症状

カメムシ防除

※ここ数年、中山間部で多く発生しているのので、注意を

【被害】

- ・吸汁害により斑点米が発生し、玄米品質が低下する

【対策】

- ・畦畔や休耕地の除草を徹底する
- ・乳熟初期(出穂7～10日後)に薬剤防除を行う

薬剤 例	スタークル豆つぶ	スミチオン乳剤
------	----------	---------



斑点米



右:クモヘリカメムシ
左:ホソハリカメムシ

【農薬の適正使用について】 農薬の登録内容:令和4年4月1日現在

- ・最新の情報を確認し、適用作物、使用時期、使用方法等を守って使用しましょう。
- ・農薬の使用前後には、防除器具を点検し、十分に洗浄されているか確認しましょう。
- ・農薬を使用したら記帳しましょう。 ・隣接したほ場へ飛散させないようにしましょう。